

種蒔きの譬えは、非常に有名であると同時に、イエスの譬えの中ではわかりやすい譬えとして知られています。イエスはご自身とともに到来している神の国を宣べ伝えますが、それは無理解な弟子たちや、自分が癒されることを願って押し寄せる人々によって、正しく理解されずに、不信の中で埋もれて実を結ばないように見えます。イエスが種蒔きの譬えを語られた後、弟子たちはこの譬えの意味を尋ねました。すると、イエスは弟子たちに「あなたがたには神の国の秘密を悟ることが許されているが、他の人々にはたとえを用いて話すのだ」と言って、譬えで話すことがかえって謎になって理解不可能なことになるということをイエスが話しているのです。そのことは10節後半にあるように、「見ても見えず、聞いても理解できないようになるためである、という言葉が示しています。

譬えで話すということは、物事をわかりやすく譬えを用いて話すことだという大前提で、私たちは理解していませんが、実は神学校に入学したての1年生の時、譬えと言うギリシヤ語には「謎」という意味もあるのだと教えられてびっくりしたことがあります。イエスが譬えで話すのは、譬えを用いてより具体的に、より分かりやすく話しているのだという先入観があったので、譬えという言葉に謎という意味があることにびっくりしたのですが、10節後半の「譬えで話すことで、逆に聞いても理解できないようになるためだ」というイエスの発言の真意が譬えという謎の形で語られた側面もあるということです。譬えという短い話で語るということは、答えをストレートに伝達する方法ではありません。イエスのように、律法学者やファリサイ派の人たちから命を狙われていたことを考えると、ストレートに結論を出す方法ではなく、譬えを用いることによって婉曲な形で真実や結論を伝える方法がとられたのでしょう。

もちろん、イエスが語るときの聞き手の多くは農民や漁師たちでした。それらの人たちは大人の男性だけということではなくて、女性や子どもも労働に従事していましたから、そのような人々にも理解できる話をしたはずです。ですから、日常生活でなじみのある事柄を取り上げる短い話でありながら、聞き手をハッとさせることもあったと思われます。聞き手は日常生活でなじみのある事柄が取り上げられることで、イエスの話が自分で理解できたように感じたでしょうが、実はイエスの問いかけである場合も多く、後からじっくり自分の頭で反芻しながら譬えの意味を考えたことでしょう。

さて、当時の種蒔きは様々な方法で行われました。ただ、日本の畑作を知っている者の目からすると、いい加減な種蒔きのように感じるかもしれません。種蒔きをする人は、種の入った袋を自分の肩にかけて、歩きながら手で種を広い範囲にまき散らしたと言われています。あるいは、ロバなどの家畜の背中に種の入った袋を載せて、ロバの歩く振動で種が落ちてばらまかれていくような種蒔きの仕方をしたようです。

ですから、鳥が種を食べる前に、農夫は畑に落ちた種の上に土をかぶせることをしたようです。当然、種が道端に落ちることや石地の落ちることもあったし、茨の中に落ちることもあったようです。石地は種が根を延ばして成長していくための土が少ないために、通常なら、太陽の日を浴びて成長するところが、根を張って水分をとることができないために、日も照らされてすぐに枯れてしまうのです。茨が生えていた土地はすき返されていたのでしたが、雑草が完全に除去されていないために茨は成長するのですが、新しく蒔かれた種は房あれてしまうために、正常に発育できなかったのでしょう。

11節～15節には、種蒔きの譬えの説明がされていて、11節によれば、種を蒔く人はイエスのことであり、種はイエスが話す神の言葉であることがわかります。しかし、神の言葉である種が道端に落ちた場合、道端に落ちた種は12節にあるように「御言葉を聞くが、信じて救われることにならないように、後から悪魔が来て、その心から御言葉を奪い去る人たちである」。石地に落ちた種は、13節にあるように、「御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じて、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである」。

茨の中に落ちた種は、14節にあるように「御言葉を聞くが、途中で人生の思い煩いや富や快樂に覆いふさがれて、実が熟するまでに至らない人たちのこと」であるという。けれども、良い土地に落ちた種は15節にあるように「立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちのことである」と言うのです。この説明書きを読むと、私たちは、自分が信仰的に良い土地になっということが勧められているように感じます。そ

して、多くの聖書解説者も種蒔きの譬えをそのように解釈してきたように思います。

けれども、この種蒔きの譬えは広い意味でイエスが神の国のことを話されてきた文脈で理解すべきです。すると、イエスご自身と共に到来している神の国のことを話しているのですから、確かに御言葉を聞き入れる人間の側のことを考えるのは大切ですが、神の国とはどういう状態の場所なのかに焦点を当ててみるならば、神は良い土地だけでなく、道端や石地や茨の中であろうと、どんなところにも、芽が出ようと出まいと、いろんなところに神の御言葉を蒔いてくださっていることに気づかされます。神が御言葉を与える対象を選び好みせず、寛大な心でいろいろな人たちに御言葉を通して神の御旨を示されているということに気づかれます。私たちは、この種蒔きの譬えを無意識のうちに種を育てる信仰者の姿を譬えたものと理解して、自分は良い土地としての立派なクリスチャンになろうと譬えを理解してしまいがちですが、ご自分と共に到来している神の国のことを宣べ伝えることに重点を置いて解釈するならば、この種蒔きの譬えは、寛大な御旨で神の御言葉を蒔いておられる神の国の姿を描いていると受け止めた方が正しいように感じます。

私たち信仰者の歩みと言うものは、信じて救われたにもかかわらず、悪魔がやってくる、途端に神の御言葉が自分の中から奪い取られてしまうものです。石地の上に土が薄くかぶさっているように、福音を十分に自分の中で養い育てることができず、太陽の熱の前に降参してしまうような心も無い信仰心です。また、試練や苦悩という茨の中にあると、その試練や苦難を信仰の力が対峙できないために、信仰心を頼りないものとみなしてしまいがちです。けれども、この種蒔きの譬えは、そのような信仰者の側の思惑や事情など一切関係なしに、御言葉が蒔かれ続けていることを言っているのです。これこそ、イエスが宣べ伝えた神の国の姿ではないでしょうか。私たちは日常生活において、たびたびエクスキューズを言い訳にして人生を過ごしていますが、それらのエクスキューズを神さまに対しても、言い訳に使ってしまいます。隣人にやさしくできなかった自分をいろいろな理由で正当化しがちです。でも、神さまは私たち信仰者がどのような醜い言い訳をしたとしても、そのような人間の側のエクスキューズを勘案することなく、神さま自身の恵みをお与えになられているのです。昔、ある有名なクリスチャンが「大胆に罪を犯せ」とキリスト者に言ったことを思い出します。確かに、神さまは良い土地にクリスチャンが育つことをお望みあること間違いのないことですが、神の恵みはクリスチャン個人の信仰の質に左右されないという真理を語ったものです。 2

ギリシア語の譬えの意味に謎という意味が隠されているのですが、イエスが語られた神の国が到来しているというのは、この神の恵みが燦燦と降り注いでいる中で、克己的に自分を神の前に立てようとする律法学者やフアリサイ派の人たちの信仰的な努力は神の国では意味がないということイエスがあからさまに宣言したから彼らから命を狙われたのです。

たとえて言えば、コップの中に水が入っているとします。このコップの水の水位は自分の現実の信仰的な姿だとするならば、律法学者やフアリサイ派の人たちの福音理解は、自分の努力でコップの水位をなるべく上まで上げて、神の祝福を受ける状態である満タンにするまで自助努力で水位を上げることに熱中した人たちです。でも、イエスは罪人や徴税人のように、いくら努力してもコップの中の水位を上げられない人も、すべて等しく、神の国では神の恵みに満たされていることを宣べ伝えたのです。ですから律法学者やフアリサイ派の人たちの信仰的な努力を無意味なものとみなしたわけです。ですから、律法学者やフアリサイ派の人たちは自分の存立基盤をイエスに否定されたと感じたのです。

私たち信仰者は、もちろん、良い土地になつて神の御言葉を養い育てて行くことを目指すべきですが、それが十分にできないことで自分を否定することはないので。神さまは、どのような者に対しても、恵みを与えて、ご自分の御旨を完成させる器として用いてくださるのです。ですから、イエス・キリストを通して御旨を示される神さまに大胆に自らを委ねて歩みだすしかないのです。今年はいースターが4月9日です。このいースターに洗礼を受けようと考えられている方がおられたら、受洗準備をしなければなりませんから、早めにお申し出ください。洗礼を受ける前に多くの方は、自分は洗礼を受けるにふさわしいのかどうかと悩まれます。けれども、神はどのような方も招いておられるのです。そして、大方の人は、自分のことは自分が一番知っていると思いがちです。そういう自分を見るならば、受洗に耐えられないと考えがちです。けれども、神さまの御旨はどのような事故理解を持つていようと、ご自分の恵みの傘の下に入ることを待っているのです。この寛大な神さまの愛に込めて今週も一人ひとりの信仰の歩みを成していきたいと願うものです。